

# 新入生イベントの今

毎年、大学には期待と不安を胸に新入生が入学してくる。これは、保護者も同じで、近年、大学の入学式には多くの保護者が出席している。こうした背景もあり、保護者からは、大学に対してさまざまな心配の声が上がっている。

具体的には、地方からの入学者（特に下宿生）の保護者からは、「大学と下宿先を往復するだけで友人ができていいのか」や、「コミュニケーションツールが発達していることに反して「大学生らしいコミュニケーション力が身に付いているのか」など、多岐にわたる声が聞こえてくる。

こうした背景を踏まえてか、各大学において、新入生に対してこれまでの学部オリエンテーションや生活協同組合などによるイベントだけでなく、大学が関わった新しい形式・内容のイベントもみられるようになった。

小特集では、各大学における新入生イベントの事例を取り上げ、その目的や運営体制、実施後の成果、運営上の課題、学生生活などを心配する保護者への対応などをご紹介いただき、現代の学生助育における課題を探り、新入生イベントの現状と効果について考える機会としたい。

新入生歓迎の集いで友達づくりを応援

—— 成功の秘訣は主催者のパッションと「手づくり」の味

川畑 一成

● 関西大学理事、関西大学教育後援会幹事長

学生が主役！ 新入生歓迎パーティー

伊藤 大

● 宮城学院生活協同組合専務理事

ピア・サポートとしての新入生歓迎企画

—— 阪南大学学生会による「CampusStart 2018」の開催 ——

権 瞳

● 阪南大学国際コミュニケーション学部教授、学生部長

新入生を大学の一員として一体化するイベントとは

—— 「OGU Welcome Festival」の取り組み

堀之内 一徳

● 大阪学院大学庶務課 課長

## 新入生歓迎の集いで友達づくりを応援 — 成功の秘訣は主催者のパッションと「手づくり」の味

川畑 一成

● 関西大学理事、関西大学教育後援会幹事長

本年4月4日、関西大学千里山キャンパスで、一人暮らしを始める新入生を対象とした「新入生歓迎の集い2018」を開催した。遠隔地から入学した新入生（留学生を含む）を中心に、大学関係者を含め約900人が参加した。会場には平昌冬季五輪などで好成績を残したフィギュアスケートの宮原知子選手（文学部3年次生）も駆けつけ、流暢な英語と日本語で「関大で、ぜひ興味のあふれることを見つけてください。私も文武両道で頑張ります！」とエールをおくった。所狭しと会場に集まった初対面の学生同士が打ち解け合うには、そう時間は要さなかった。終盤には、女性ばかり5人の即席の「チームたこ焼き」まで生まれるなど、初めての試みとしては大成功であったといえる。

### 1 「新入生の友達づくり」のための企画

全国の大学の中で、一人暮らしの新入生のための本格的かつ大規模な歓迎会を、大学主催、参加費無料で開催するのは異例といえよう。大学と教育後援会が毎年共催して全国各地で実施している地方教育懇談会で、親元を離れて大阪に下宿している学生の父母らから



まずは「大阪の味」で新入生を迎える

「入学したが、友人がなかなかできない」などの声が、ここ数年寄せられていた。そこで教育後援会が発案し、大学との共催行事としてこの歓迎会を企画したのである。実施段階では、校友会、さらには下宿を斡旋した新入生を対象に、これまで類似のイベントを開催していた関西大学生生活協同組合（以下、関大生協）の協力も得て、「オール関大」大学ぐるみの歓迎会」という最善の枠組みで実現することができた。諸費用は、全て教育後援会が負担。新入生の学生生活に対する不安や疑問を解消するために、数十名の上位年次生にも、メンターとして参加してもらった。

## 2 「新入生の友達づくり」のための仕掛け

会場となった学内の大ホールでは、これまでの学内集会のノウハウを生かした関大生協のアイデアで、大盛りのおこ焼きやお好み焼きなども登場し、大阪の味で遠隔地からの新入生を出迎えた。さらに、おこ焼きの船盛りの模型や写真撮影用の巨大なパネル写真なども会場のあちこちに展示したので、学生たちのスマホのシャッター音がさかんに響いていた。学部ごとにテーブルを囲んだ学生の胸には、受付で渡した出身県などを明示したカー

ドを付けてもらい、学部内はもちろん、学部の枠を超えて、同じ郷里の学生を見付けやすいように工夫した。さらに、教育後援会の執行役員ら約20人にも、「大阪の母」「大阪の父」のリボンを胸に、会場入口で新入生を温かく迎え入れていただいた。

## 3 一体感を高めるサプライズな演出

冒頭、大学側の主催者挨拶と第96代応援団による歓迎セレモニーに続いて、最大のサプライズである宮原知子さんの登場。壇上で村岡基・教育後援会長（当時）が彼女を紹介し、「私がやるよりこの人のほうが良いでしょう!」と自身の乾杯の発声役を宮原さんに譲った上、その直後

に、氷上さながらにクルッと一回転してもらおうというパフォーマンスまで飛び出し、会場は大いに盛り上がった。

中盤では、学生部担当の副学長と学生センター所長、



壇上で軽やかにジャンプ

は手拍子とともに沸いた。  
 サプライズ・ゲストの最後として舞台に登場したのは、この春、本学を卒業したシンガーソングライターの花房真優さん。彼女は在学中にさまざまなコンテストで賞を獲得し、ラジオのパーソナリティーなど幅広く活動している。この日も、夢をかなえた先輩のひとりとして代表曲を披露し、学生と一体となって会場を盛り上げた。



副学長らがバンドの生演奏を披露

これに経済学部教授と女子学生2人が加わって、この日のために結成したロックバンドが歓迎ライブを披露。教員に対する親近感も相まって、会場



会場を盛り上げる花房さん

## 4 参加した新入生の声

主役の新入生は、集いの始まりでは、お互いが初対面のせいもあってやや緊張気味だったが、さまざまな仕掛けやライブなどによって会場の雰囲気盛り上がり、やがて打ち解けて、メールアドレスやLINEのIDなどを交換していた。会場の声を取材してもらったが、参加者の満足度はなかなかのものだった。例えば、高知県出身で文学部の男子学生は、「今日の集いのおかげで、同じ教職志望の友人ができました。共通の目標を目指して頑張ります」と語った。商学部のテンプルでは、香川県小豆島出身の女子学生が、同じ留学志望の新入生と親しくなり、スペインやカナダでの勉強の話題で盛り上がりつつあった。メンターとして参加した先輩学生たちも、「私の入学時は、同じ高校出身の人たちで固まる傾向があ



この日出会った仲間と“チームたこ焼き”を結成

り、友達づくりがしんどかったので、こういう集いはありがたいですね」と感想を語った。そして、大盛りのたこ焼きコーナーで最もテンションが高くなったのは、学部を超えて 仲良くなった女子学生の5人組。全員初対面だが、串刺しの大粒のたこ焼きを食べるうちに意気投合し、大型パネルやインスタグラム用のパネル枠を使って、全員でピース。「私ら、チームたこ焼き、やね」とまぶしい笑顔で語ってくれた。

## 5 イベントを振り返って

先にも述べたが、この企画は、遠隔地から入学してくる新入生を対象に大学を挙げて歓迎会を開催し、友達づくりのきっかけを提供し、あるいは先輩からのアドバイスや語らいによって、大学に早くなじめるような場を作ることが最大の目的である。その端緒は、友達づくりを支援してほしいという、遠隔地から子女を下宿させる父母・保護者の切実な声である。その要望を、教育後援会が大学に組織的に働きかけて実現したものである。本学は約3万人の学生が通う大規模校だが、今回のイベントのアンケートでは、「学生目線の集いで居心地が良かった」「明日からの学生生活に期待がもてて嬉しい」といっ

た感想も多く、きめ細かで面倒見の良い大学であることが印象付けることができたと思われる。これはすなわち、学生の帰属意識の向上はもとより、減少傾向にある近畿圏以外からの学生を少しでも多く確保することによって、キャンパスにおける発想と文化のダイバーシティを持続的に生み出し、全国に向けた発信力を高めたいという、大学執行部の意向とも合致するものである。

## 6 成功の要因は何か

本学が開催した今回のイベントにおいて、成功の要因、あるいは不可欠なファクターを挙げるとすれば、概ね次の3点ではないかと思われる。

第一に、教学と法人の理解を前提に、全学的な協力体制が組めたことである。学長室と学生センターをはじめ、入試センター、広報課、総務課、校友会、関大生協など、関係する部局や団体との事前打ち合わせによって、教育後援会が発案したこの企画の趣旨、目的と手段、期待される効果に対する理解を得て、各所におけるできる限りの対応を皆で行うことができた。新入生歓迎行事など、ただでさえ繁忙を極める4月の初めに、この規模の行事を新規に実施したわけである。日程の設定、事前告知、

集客数の見込み、会場設定と準備、安全確保等々、さまざまな心配事も伴う。学生の父母組織として、大学を強力に支援する教育後援会のこれまでの実績が、大学のステークホルダーの心をまとめ、このイベントを実現するための突破力のひとつになったのかも知れない。だとすれば、外郭団体の特性を活かす好例として、この組織の今後の役割と可能性に期待が持てよう。その意味においても、関係者には心から感謝申し上げたい。

第二に、全てが「手作り」であるということ。イベントの仕掛けやサプライズは、先述のように、教職協働はもとより、各界で活躍する在学生や卒業生を巻き込む、ボランティア精神と手作り感覚が結実した一大イベントであった。

この自分たちの「手作り」でもてなそうという「ホストⅡ大学側」のパッションこそが、新入生の心に届く何よりのプレゼントではなかったかと思



手作りのパネル。左にはたこ焼きの船盛り模型

う。「手作り」の例は会場内のあちこちに仕掛けられている。例えば大阪環状線のパネル展示である。JR大阪環状線に不慣れた学生にとって必携の、大阪駅など19駅の周辺の「面白ポイント」を紹介した冊子から抜粋したパネルである。これもプロの作品ではなく、総合情報学部3年次生の女子学生2人が「足まめ」に取材して作成したものである。

後日、この冊子にJR西日本が注目し、1万部を印刷したという優れものである。

ちなみに、このイベントの発案者は、下宿しながら本学に学び、卒業後に本学職員となった教育後援会の職員である。この催しの本質的な必要性を肌で感じたからこそ、さまざまな課題を克服してイベントの実現に最後まで貢献できたのであろう。そうして、事務局の企画案を



参加してよかった！ 盛り上がる会場

目にした教育後援会の村岡基会長（当時）は、「これこそがわれわれ父母から新入生に贈りたかった最高のプレゼントです！」と大いに賛同され、実施に向けて執行部役員の方々と共に率先してお力添えをいただいた。これを受け、イベントの企画・運営に慣れた同会所属の事務職員が、会場のレイアウトや進行要領などをほぼすべて準備した。

実は「手作り」による手法は、今年で創立71年目という歴史を刻む教育後援会のお家芸でもある。機会があれば、この歴史と実績も紹介したい。大学と家庭の心の懸け橋を標榜してきた教育後援会。そこに受け継がれている崇高な奉仕の精神と、「手づくり」によるフロンティアの足跡は、興味深いものがあると思う。

これらの結果として、大学の内外を問わず、「自前でもよくここまでやった」「心が通っていた」と賛辞をいただいた。

最後に、さまざまな仕掛けと、メディアへのアピールに効果的なアイデアや味付けをいただいた広報アドバイザーの存在がある。本稿の会場での声の聴き取りのくだりでもご助力願ったが、企画と実行プラン策定の段階からスパイスの効いた提案をいくつもいただいた。メディア

アの最前線で指揮を執った豊富な経験とネットワーク。そして何よりも訴求力を最大限に引き出すタイミングの見極め。こうしたプロの目が、今後の大学広報には不可欠である。しかも、この先生はれっきとした筋金入りの「手づくり」派である。

今回のイベントの模様は、教育後援会が制作する大学紹介映画のラストシーンを切なく、爽やかに締めくくっている。来年は2回目の実施となる。さて、次はどんな新企画が飛び出すか。担当者は今からこの「手づくり」のイベント企画に思いをはせている。



## 学生が主役！ 新入生歓迎パーティー

伊藤 大

●宮城学院生活協同組合事務理事

### はじめに

宮城学院女子大学では、新入生向けの学生交流行事として、次の行事を開催している。

- (1) AO・推薦合格者向け早期合格者の集い  
(2月 企画…大学 運営…生協)
- (2) 新入生歓迎パーティー (4月 企画運営…生協)
- (3) 新入生歓迎会 (5月 企画運営…学友会執行部)  
※スポーツ大会

今回は、宮城学院生協学生委員会MG STEPS (以下、STEPS) が開催する「新入生歓迎パーティー」について報告したい。STEPSは生協理事会直轄の学生団体で、現在12名の学生が所属している。主な活動は、新入生歓迎パーティーの企画運営、早期合格者の集いの学生交流プログラムの企画運営、新入生歓迎冊子の

編集、日常的な組合員企画の実施、総代会の運営補助などである。

### 1 当日のプログラム

入学式の前日開催が通例であり、収容人員の都合で午前の部と午後の部に分けて実施している。

#### 第1部 交流ゲーム

サークル紹介に参加する先輩学生がリーダーを務め、「自己紹介すごろく」を行っている。ミニゲームを通して同じ時間を過ごし、初対面であるメンバー同士のアイスブレイクを行いつつ、入学前に同じ学科・専攻の同期生や先輩とのつながりをつくるきっかけを提供。

### 第3部 学生生活紹介

入学後、スムーズな学生生活を送るために知っておくべき情報を伝える時間として設定しており、「学内施設の利用方法」「教科書購入」「売店や食堂の利用方法」「賠償責任保険への加入」「アルバイト紹介」などの案内を行う。

新学期に不満の多いのが食堂の混雑であり、年間を通して最も混雑

学内の各部・サークルが活動紹介や歓迎演舞・演奏を行い、学内外の活動をアピールする場となっている。出演する学生にとっても、ここでのアピールが部員獲得の大きなチャンスであり、それぞれ工夫を凝らして取り組んでいる。



79 | 大學時報 2018.9

する時期に利用方法のあやふやな新入生が来店するため、混雑度はさらに増してしまう。残念ながら、昼休み時間内に昼食をとれない「昼食難民」が毎年発生しており、少しでもスムーズな利用を促すために食堂利用の案内動画を作成し、放映している。

以上でプログラムは終了とするが、参加者の表情を見ていると、終了後のフリータイムがパーティー参加の集大成のようなのだ。入学式前日ということもあり、主催する側としては時間の確保に悩まされるところではあるが、パーティー終了後はすぐに撤収せず、自由交流できる時間を確保するようにしている。イベントを振り返って飲談したり、LINEに代表されるSNSアカウントの交換などで盛り上がりを見せている。

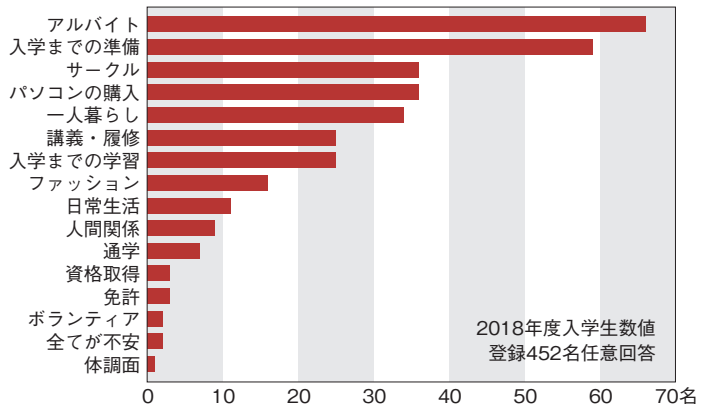
## 2 新入生はどんな不安を抱えているのか

新入生が、さまざまな「期待」と「不安」を抱きながら入学の日を迎えることは想像に難くないが、その「期待」や「不安」は、われわれや保護者の想像とかけ離れている場合も多い。知りたいことと伝えたいことに齟齬が生じないように、早期合格者の集いのWebエントリー時とパーティー終了後に参加者アンケートを実施し、企

画にフィードバックさせるようにしている。

アンケートによると、「入学までの準備物・学習」「サークルやアルバイト」「一人暮らしへの不安を抱える学生が多い。次いで、「人間関係」「服装やメイク」「大学での生活が想像できない」などの不安が続く。

「キャンパススケジュール」や事前準備が必要な「ファッション」「パソコン選び」「アパート探し」など、一覧することによって不安をある程度解消できる項目については、合格発表後、STEP5が発行する合格者向



図表2 参加者アンケートより「入学にあたって不安なこと」

け情報誌「Pa o」にまとめて生協から郵送している。また、「友達ができるか心配」「大学での生活が想像できない」などについては、実際に同じ不安を抱える仲間が集い、交流することによって不安解消のきっかけとなるようにしている。

つまり、不安を抱えた新入生への対応に当たっては、「情報提供で対応できる」項目と「対面で対応すべき」項目を分けて企画することが必要だと考えている。

### 3 学生主体で企画運営することの意義

新入生が経験したように、先輩学生も入学時の不安や悩みを実体験として持っており、一学生として、あるいは先輩として身近な立場で伝えられるという点では、新入生に近い先輩学生だからこそ寄り添えることも多い。

また、学生を主軸に据えることにより、新入生歓迎パーティーがその学生自身の「学びの場」となって大きな成長の機会となるばかりでなく、そうした経験や新入生に対する想いを学生同士が脈々とつないでいくことによって、イベントの成果をより大きいものにしていくことができるのではないかと考える。

開催に当たっては、学内の各部局、特に教務グループ・

学生支援グループ・財務施設グループ、学友会の協力なしにこの企画は成立し得ないので、STEPSの学生が学内各部局と調整・連携し、準備を進めていく。併せて、予算も自分たちで考え、われわれに提案することによって初めて執行できる仕組みになっている。

### おわりに

大学を含め、宮城学院のみなさんから、「生協は自分たちが作り、運営に参加している団体」として日常的に多大なるご支援をいただいております、感謝にたえない。さまざまな学生のためになる活動に対するご支援の一環として本企画への開催協力があり、学生が大きなイベントに自主的に取り組める環境が育まれていると思う。

このような取り組みを通じて、学生は充実した生活を送ることができ、社会で活躍する基礎を学ぶ場となることは両者共通の願いであり、学生のために、という価値観を共有して取り組んでいることが大学の魅力をさらに大きくし、輝く学生が集う結果につながっていると考える。



## 小特集

### 新入生イベントの今

# ピア・サポートとしての新入生歓迎企画 —— 阪南大学学生会による「CampusStart 2018」の開催 ——

イベント

権 瞳

● 阪南大学国際コミュニケーション学部教授、学生部長

## はじめに

阪南大学では、2017年度から、学生会の主催による新入生歓迎イベント「CampusStart（キャンパス・スタート）」を実施している。このイベントは、入学式から授業開始までの新入生対象のオリエンテーション期間の最終日に、1日を費やして行われる。2018年度は、4月9日(月)に開催された。

新入生の学生生活への円滑な移行を支援することを主たる目的とした歓迎行事は、これまでも学部ごとに行われてきた。しかし、入学時に華やかな歓迎ムードを演出するよう、大学側が学生会に働きかけたことを契機に、「CampusStart」が新たに加わることとなった。

本年度、2回目となった「CampusStart 2018」は、学

生会が1年目の経験を基にして、より主体的に取り組み、学生の視点から新入生のニーズを汲み取った上で、仲間を迎えるに当たった企画・運営を行い、いわばピア・サポートとしての新入生歓迎イベントを実施した。このプログラムの概要、担い手である学生の取り組み、新入生の反応について紹介するとともに、実施の意義や今後の課題について述べる。

## 1 「CampusStart 2018」の概要

「CampusStart 2018」は、大別して、新入生が新しい環境になじむための支援的な要素と、「プチ大学祭」のようなお祭りの要素を取り入れて構成されている。学内施設を巡る「スタンプラリー」、学部ごとに先輩学生が新入生の相談に応じる「よろずブース」、お笑い芸人を招いた

「お笑いライブ」、キャンパス内に仮設ステージを設置して行うゲーム大会やクラブのデモンストレーションなどが、その構成内容である。このほかに、クラブ勧誘のためのブースも設けられた。

新入生は、まず学部ごとに集合し、プログラム全体の説明を受けた後、大会場でお笑いライブを観賞し、その後はスタンプリーに参加したり、よろずブースや各クラブのブースを訪ねたり、ステージの企画を楽しむなど、思い思いに過ごすことができる。本年度は、新入生1270人のうち1057人（約83%）が参加した。

## 2 イベントの担い手

このイベントの担い手となったのは、2017年度に学友会を改組し、新しく設立された「阪南大学学生会」の実質的な運営委員である学生会連合委員会を中心に、大学祭実行委員会、体育会・文化会クラブ、および各部の学生会担当者であり、総勢105人が運営に携わった。

学生会が発足したばかりの組織であることから、実のところ、今に至るまで、全ての委員が学生会の役割や各自の役割について、明確に把握しているとはいい難く、

試行錯誤を繰り返しながら、組織や組織における自分たちのアイデン

ティティーを模索している状態である。そうした状態にありながら、あるいはそうした状態であるからこ

そ、学生からは、2年目の歓迎イベントは初年度よりもさらに学生としての立場から企画し、学生会全体で取り組んでいきたいとの強い意気込みが感じられた。

「Campusstart 2018」は、「先輩学生が新入生を歓迎する気持ちを形で表した」イベントであるという簡潔な説明がホームページで公表されているが、主担の学生からは、より具体的な目的や目標が背景にあったことが述べられた。すなわち、①新入生に対して、大学は「自由」



キャンパス風景

で「楽しい場」であることを知らしめること、②先輩学生が学修や学生生活の相談に乗ることにより、入学時の不安を和らげるだけでなく、入学後も支え合う学内文化があるということを示すこと、③大学生は、自分たちが行っているように、主体的にさまざまな企画を実現できるということを見せること、④クラブ、大学祭実行委員、そのほかの学生組織への参加を促すこと、⑤そのような団体に加わることにより、学部や学年の違いを超えて多くの人と知り合い、充実した学生生活が送れるということとを伝えること、などである。そして、このような目的に沿うプログラム内容が決定されたということである。

企画・運営に携わった学生は、新入生の期待と不安、入学式直後に、緊張の解けぬままに講義室に集められ、歓迎とは無縁の雰囲気の中でクラス分けテストを受けたり履修説明を受ける様子を、自らの体験を通して熟知している。それゆえに、学生会主催の「CampusStart 2018」は、新入生が緊張を解きほぐし、自由に行動でき、学生生活や授業について、同じ学生の立場から相談できるというイベントでなくてはならず、そこに「先輩学生の歓迎の気持ち」を表そうとしたのであった。

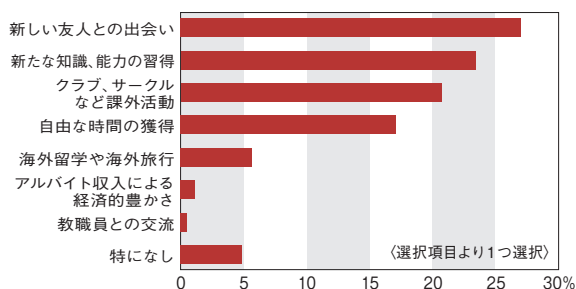
### 3 新入生のニーズとイベントの受け止め

さて、このような先輩学生の歓迎の意を、新入生はどのように受け止めたのだろうか。

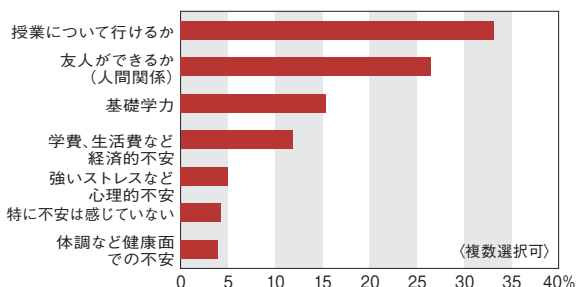
まずは、本学の新入生の期待や不安について、本年度に学生課が実施した「新入生学生生活ガイダンスアンケート（2018年4月5日実施 N=859・有効回答率67%）の結果から見てみたい。これによると、「大学入学後の一番の楽しみ（図表1）」については、大学における新たな学びへの期待が高い一方で、「新しい友人との出会い」（27%）、「クラブ、サークルなど課外活動」（21%）など、授業以外の人間関係づくりや活動に興味を示していることが分かる。

また、入学後の不安については（図表2）、単位修得も含めて「授業についていけないか」（33%）と同時に、「友人可以るか」（26%）など、人間関係に不安を覚えているという回答が多く、「特に不安は感じていない」は4%にとどまった。

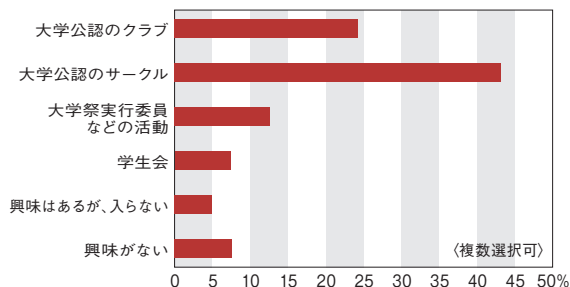
どのような課外活動に興味を持っているかという問いについては（図表3）、「大学公認のサークル」（43%）、「大学公認のクラブ」（24%）、「大学祭実行委員などの活



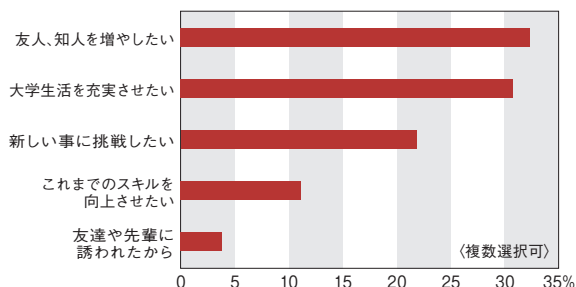
図表1 大学入学後の一番の楽しみはなんですか？



図表2 大学入学後、何か不安なことはありますか？



図表3 大学の課外活動（クラブ、サークル）に興味はありますか？



図表4 大学の課外活動に参加する目的は何ですか？

動」(13%)と回答しており、多くの新入生が何らかの活動に参加したいと考えていることがうかがわれる。そして、こうした課外活動に参加する目的は(図表4)、「友人、知人を増やしたい」(32%)、「大学生活を充実させたい」(31%)と、人間関係の拡充や学生生活の充実を目的とした回答が目立った。

このアンケート調査からは、入学したばかりの新入生

の多くが、大学の学びや人間関係に不安を覚えながらも期待を寄せている様子が察せられた。特に、学生生活を充実させていくためにも、何かしらの課外活動に挑戦し、人間関係を広げていきたいという気持ちを抱いていることが分かる。

一方、「CampusStart 2018」当日に配付・回収したアンケートによれば、回答者のおおよそ80%がこのイベント

に満足したと答えている。アンケートの回収率が低いために、この結果のみでプログラムの評価をすることは難しい。しかし、筆者が後日、インフォーマルなプログラム評価として、いくつかの新生対象の授業で感想を尋ねたところ、アンケートの結果同様、おおむね楽しかったという好意的な意見が述べられた。他方、入学したばかりで友人もいない場合、昼食後の時間をどのように過ごせばよいかかわからず、強制力もないためにすぐに帰宅したと答えた者も少なくなかった。お笑いライブについても、楽しさや意外性について肯定的に評価する者が多数を占める一方で、「なぜお笑いライブなのか」という必然性が不明だと述べる者もあった。大学における自由や学生の主体性を尊重したかったという先輩学生の思いを感じとりながらも、右も左もわからない時期にあつては、まずは、もっと新生同士が知り合えるような企画が欲しかったという指摘もあった。

批判的な意見はあるものの、「CampusStart 2018」は新生から総じて好意的に受け止められたといえる。また、一時減少傾向にあったクラブなどの課外活動への加入率が、2017・2018年度と続けて若干の向上を見せていること、特に大学祭実行委員会への参加率が大

きく伸びたことについては、このイベントの影響が少なからずあったものと考えられる。

#### 4 今後の課題と展望

以上のように、「CampusStart」は、新生のニーズに学生の視点から応えようとする全学的イベントとして、2年目の実施を終えた。大学主催の新生オリエンテーションは、まずは授業の開始に向けた教務課のガイダンスが最優先であり、その他の部署からも、務めとばかりに新生に大量の情報が一方的に与えられる。学生によるイベントは、このような中に不在であった「歓迎の気持ち」を伝え、同じ学生としての立場から、新生がよりスムーズに学生生活になじめるようにとの思いを込めた、有意義な企画である。

次年度以降の継続については課題もある。何より、4月の新学期開始の多忙な時期に大きな行事を成し遂げたことの達成感と疲労感が先立ったためか、主催学生の間で、新生がプログラムをどのように捉えたかの客観的な分析が行われておらず、そのために、このイベントについての十分な総括ができていないことは大きな課題である。改善に向けて、次年度の企画前に冷静なプログラ



学生会によるガイダンス

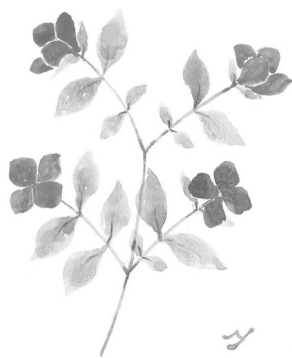
ム評価を実施する必要があるだろう。

同時に、主催者である学生会の力量の蓄積と、運営に関わる学生の負担の軽減も課題の一つである。学生は2018年2月から本格的に企画を開始し、業者など、外部団体とのやりとりを含めた前準備に加え、前日の会場設営など、かなりの時間と労力を費やした。そのため、バーンアウトともとれる状態がもたらされ、4月以降の

学生会の活動においても支障が生じたようであった。誕生間もない組織であり、今後毎年メンバーが入れ替わる中で、イベント企画のためのノウハウや運営のスキルを身に付け、伝え、組織を動かしていくことは容易ではない。学生の主体性を重

んじたいとしながらも、実際にはさまざまな場面で学生課職員の指導と支援が不可欠であったが、今後も、よりよい企画・運営に向けた担当職員や教員との協働が求められる。

「CampusStart」は新入生のための歓迎イベントでありながら、この行事に関わる先輩学生にとっても、課外における大きな学びの機会となっていることは間違いないであろう。始まったばかりの新入生歓迎イベントであるが、教育課程内・外を含めた総合的な教育効果を高めていくプログラムとして、改善し、継続していきたい。



## 新入生を大学の一員として一体化するイベントとは ——「OGU Welcome Festival」の取り組み

堀之内 一徳 ●大阪学院大学庶務課 課長

### はじめに

大阪学院大学は、大阪の都心ほど近い大阪府吹田市にキャンパスを有し、ＪＲおよび阪急電鉄の最寄駅からいずれも徒歩約５分で通学できる交通至便な場所に立地し、近畿地方のみならず、全国各地から毎年多くの新入生を迎えている。このような状況の中、親元を離れ一人で生活する新入生も少なくないため、不安や悩みを共有できる友人がいることは、非常に大きな心の支えとなる。

そこで、大阪学院大学では、新入生が入学直後から充実したキャンパスライフを送ることができるよう、友人づくりを主な目的とするさまざまなイベントをいち早く開催してきた。

入学前の３月上旬に実施する「入学予定者の集い」で

は、入学予定者を学部・学科ごとに15名程度の小グループに分け、上級生が中心となって趣向を凝らしたレクリエーションを行ったり、入学予定者の疑問や悩みなど、さまざまな質問に答えたり、さらにはホームページに入学予定者専用サイトを開設し、ネットを通じたコミュニケーション手段を設けるなど、友人づくりや入学前の不安解消を図っている。

また、入学後のオリエンテーション期間中には、学生課が主導し、学部・学科ごとに「コミュニケーションワークシヨップ」と呼ばれる参加型のイベントを複数回盛り込むことにより、新入生の緊張を解し、キャンパスライフに慣れることを目指している。この「コミュニケーションワークシヨップ」の内容は、学部・学科によりさまざまであり、例えば商学部では、「OGU (Osaka Gakuin



学生に協力を仰ぎ、教室ごとに分かれてスタンバイしている留学生たちを新入生のグループが順番に回り、コミュニケーションを図るという企画を行っている。また、情報学部では、「数学パズル」をチームで協力して解き、正解した数を競うというイベントを行っている。

これらに加え、入学式当日には、式終了後の恒例イベントとして、上級生で構成する実行委員会主催の「新入生歓迎会」を実施している。この「新入生歓迎会」では、タレントを招いての「お笑いライブ in OGU」や、

University)を知り尽くそうトレジャーハンター」と題し、配られた指令書を基にチームで協力してキャンパス内を探索し、暗号を解読するというイベントを行っている。また、外国語学部および国際学部では、「OGU 世界コミュニケーション」と題して世界各国から本学に留学している留

ビンゴ大会を盛大に行い、これからのキャンパスライフに対する新入生たちの期待感を高めるよう努めている。そして、2016年度からは、この「新入生歓迎会」も取り入れた、より大規模な「OGU Welcome Festival」を実施している。

本稿では、このOGU Welcome Festivalに焦点を当て、実施の背景や目的、内容などについて紹介したい。

## 1 OGU Welcome Festival 実施の背景

前述のとおり、これまでは入学式当日に「新入生歓迎会」を実施してきたが、歓迎会が終わると新入生や保護者の多くは帰路についてしまうことが多かった。そこで、もっと大学の魅力を伝え、楽しんでもらえる企画を立案することにより、キャンパスでの滞在時間を増やし、入学した喜びや安心感を存分に味わえる機会がつかれないものかという意見が教職員間に浮上し、その具体策を検討する機運が生まれた。

その後、庶務課を中心に部署を横断してミーティングを重ねた結果、新入生や保護者の思い出に深く刻まれるような新たな企画として、2016年度からOGU Welcome Festivalを実施することとなった。

## 2 OGU Welcome Festival 6西館

OGU Welcome Festivalの目的は、入学式という特別な日に、お祭りのような賑やかさを演出することにより、新入生のみならず保護者の方々にも楽しんでいただき、大学を挙げて新入生を歓迎しているという姿勢を実感していただくことにある。そして、これから始まるキャンパスライフに対する不安を払拭し、たくさん仲間とともに本学で夢を実現させたいと感じていただくのである。

そのため、在学生や教職員だけでなく、卒業生や地域の方々とも一体となって、「オールOGU」で新入生を祝福する企画を目指して検討を行った。ミーティングではたくさんアイデアが出されたが、その中から実施可能であり、かつ趣旨に沿うものを取捨選択し、最終的に現行の内容に辿り着いた。

## 3 OGU Welcome Festival 6T、6H、6N

OGU Welcome Festivalの際に行っているイベントや工夫は、次のとおりである。

なお、前述の「新入生歓迎会」は、2016年度からOGU Welcome Festivalのイベントの一つとして位置付

けているが、内容は変更していないため、説明は割愛する。

### (1) お祝いの「パネル」「のぼり」の設置

JRと阪急電鉄の本学最寄り駅に許可をいただき、新入生を祝う大きなパネルを設置している。新入生は、駅の改札を出ると「入学おめでとう」と書かれたピンク色の大きな看板に迎えられる。さらに、駅から本学へと向かう通学路には「おめでとう!! はばたけ! 大阪学院大 学生!」と書かれたピンク色ののぼりを立て連ね、新入生を歓迎している。こののぼりは、通学路にある各店舗にお願いし、軒先に掲出させていただいているものであり、街を挙げて入学を祝福していることが実感できる取り組みである。

### (2) オリジナルバルーンの配布

OGU Welcome Festivalのオリジナルロゴや大学名を入れた白色とピンク色の風船を約600個用意し、上級生が新入生に声をかけながら配布している。キャンパス内は風船を持った新入生で賑わい、非常に華やかな雰囲気醸し出す。イベント終了後、風船を持った新入生が帰宅の途に着く際には、周囲への大学の宣伝効果も期待



できる。

実は、このオリジナルバルーン企画にはエピソードがある。風船にはヘリウムガスが入っているため、うっかり手を放すと大空へ舞い上がってしまうのであるが、それらの風船のいくつかは、風に

乗って遠方に飛来することがある。2017年はキャンパスのある大阪から東京まで辿り着いた風船があり、後日、風船を拾われた方から本学へ、新入生の入学を祝う温かいメッセージが寄せられ、企画スタッフは驚きとともに非常に感動することとなった。

### (3) 学内の記念写真撮影スポットなどの案内

本学のシンボルの一つである時計塔や噴水などの撮影スポットに「入学おめでとう」と書いた大きな看板を設置し、背後からシャボン玉を大量発生させる装置を使ってシャボン玉をたくさん飛ばして、多くの新入生が

友人や保護者と一緒に記念撮影できるよう工夫している。

また、Instagramの画面を模して作成した大型の顔出しパネルを持った上級生が、新入生のグループに声をかけながら手渡し、フレームから顔を出してもらって写真撮影を行い、思い出づくりに一役買っている。また、撮影したこれらの写真を新入生がSNSなどに投稿するため、広く宣伝効果も期待できる。

### (4) 模擬店の出店

会場には、主にクラブに所属する上級生や留学生たちにより、フライドポテト、フランクフルトソーセージ、ポップコーンや焼き鳥などバラエティに富んだ模擬店が出店されるほか、職員有志による模擬店も出店される。また、抽選により、駄菓子のプレゼントを行うブースも出店され、大当たりに出るたびに鐘の音が鳴り響き、抽





選結果に一喜一憂する新入生で大きな盛り上がりを見せる。

なお、これらの模擬店で使用できるバザー券を事前に配布し、多くの新入生が積極的に利用している。

さらに、本学卒業生の同窓会組織である「校友会」から全国10支部の会員が選りすぐりの地元名産品を携えて OGU Welcome Festival に集い、新入生との会話を楽しみながらそれぞれの品をプレゼントし、祝福している。

このほか、移動販売車によるデザートなどの販売も行っており、イベントに花を添えている。

#### (5) クラブパフォーマンスの実施とクラブ紹介ブースの設置

クラブやサークルの有志によるパフォーマンスでは、吹奏楽部やアメリカ民謡研究会、アカペラサークルなど

が日ごろの練習の成果を新入生に披露している。

一つの仕掛けとして、パフォーマンス前に行うクラブ・サークルの紹介に加え、活動の目的や個々人の将来の夢なども語ってもらうことにより、新入生に入学後の目標や将来の夢を思い描いてもらえるよう工夫している。

また、クラブやサークル以外にも、プロのストリートパフォーマンスを招聘し、きれのあるパフォーマンスで新入生たちを魅了している。

入学後、クラブやサークルに所属し、ともに一つの目標に向かって活動することとは、キャンパスライフを送るうえで非常に有意義な時間となるので、各クラブ・サークルはブースを設け、新入生に対してクラブ紹介を行っている。また、クラブ生には、イベント会場内を自由に歩き回り、新入生たちに積極的に声をかけるように指導している。



## (6) 卒業後半世紀となるOB・OGの招待

卒業からちょうど50年を迎える卒業生を入学式にご招待するとともに、「OGU Welcome Festival」に参加いただいている。また、新入生と交流する機会を設けることにより、お互いに年齢やキャリアの差を超え、大学の歴史の蓄積や、実社会における大学のネットワークの広さや深みを体感してもらうとともに、その一員としての自覚と誇りを共有できるようにしている。

## 4 成果

冒頭に記したとおり、OGU Welcome Festivalをはじめ、入学前の3月上旬に実施する「入学予定者の集い」「オリエンテーション期間中に実施する「コミュニケーションワークショップ」など、新入生が速やかに本学のキャンパスライフに順応できるような仕掛けや工夫を数多く取り入れることにより、以前に比べて、比較的早期に友人づくりができています。既に4月の段階で、新入生が複数のグループで楽しそうに過ごしている姿を、キャンパスのいたる所で見られるようになった。

本学において、離学者対策は最重要課題の一つであると認識しており、離学する理由に応じてさまざまな対策

を講じている。修学意欲の喪失により離学する学生の中には、友人ができずキャンパスライフが楽しくないことを理由に挙げるものも少なからずいることに鑑みると、入学後早期に友人ができるような取り組みは、非常に効果的な対策となるのではと考える。その意味で、入学後、多くの友人に囲まれて、本学のキャンパスライフを楽しんでいる姿が多く見受けられるのは大変好ましい傾向である。また、上級生が積極的にイベントに参画することにより、新入生同士の横のつながりだけでなく、縦のつながりも早期に構築できることが、これらの取り組みの特筆すべき点である。

なお、本学では毎年度、夏期休暇中に全年次の保護者を対象として「教育懇談会」を開催し、学修状況や就職活動状況、学生生活などの相談を行っているが、この「教育懇談会」とは別に、毎年度5月中旬に初年次生のみを対象とする「教育懇談会」を実施している。授業開始後1カ月少ししか経っていないこの時期に実施するのは、ゼミナール担当教員と保護者が早期に面談を行うことにより、授業の出席状況や普段の学生生活の状況を共有するとともに、問題が見受けられる場合は、大学と保護者が協力して軌道修正を図れるようにとの考えからである。

保護者にとっては、普段知ることのできない大学での様子を知ることができる絶好の機会であるため、非常に好評である。

## 5 課題と今後の展望

2016年度から実施している OGU Welcome Festival<sup>®</sup>は、今年度で既に3回目を迎えた。全くの新しい取り組みであったため、初年度は半ば手探りの状態で実施したのであるが、イベント終了後に毎回振り返りを行い、改善を積み重ねた結果、ようやく一つのスタイル（型）のようなものが定着してきた。しかしながら、細かい部分では未だ改善の余地が残されている。

例えば、雨天時の対応である。過去3回は幸いにも雨には見舞われず、予定どおりの内容が実施できたが、降雨の場合、いくつかのイベントは場所を変えねばならない。そのため、イベントごとに前もって雨天時対応マニュアルを整備し、スタッフ間で共有しておく必要がある。

また、OGU Welcome Festival は大学を挙げての大イベントであるため、事前の準備や当日の運営には膨大なマンパワーを要する。そのため、作業のさらなる効率化を図ることにより、個々のスタッフの負担をできる

だけ軽減する方策が必要である。

さらに、実施にかかるコストについても、極力むだを省き、抑制するよう努めなければならない。

今後の展望として、一層磨きのかかったイベントへと進化し続けることができるよう、例えば参加者やスタッフにアンケート調査を行うなど、積極的に多様な意見を取り入れることによって、さらなる改善と新たな仕掛けの検討を進めていきたい。

キャンパスに滞在する時間が長ければ長いほど、本学に対する学生の満足度は高くなる傾向があるため、さまざまな目的に応じた学生の居場所をキャンパス内に多数設けることが必要である。新たな居場所の創出はもちろんであるが、まずは、キャンパス内の施設や設備などを早い段階で熟知させる工夫が急務である。そのため、



OGU Welcome Festivalだけでなく、学生がキャンパスに長く滞在する仕掛けを絶えず検討し、学生の愛校心を育みたい。

## おわりに

本学では、在学生、卒業生、保護者、教職員、さらには地域の方々など、本学に関わる全ての人々は仲間であるとの思いから、「Team OGU」をスローガンとして掲げている。何事も最初が肝心であるため、OGU Welcome

Festivalをはじめとするさまざまな取り組みを通じて新入生の不安を払拭し、一日も早く、「Team OGU」の一員としての自覚が芽生えるよう、今後とも努力を続けていく所存である。

このたび紹介した本学の取り組みが皆様の参考になれば幸いである。☺

